

## 2017年度 プロジェクト研究所業績報告書（中間報告）

プロジェクト名	能動的学習における成績評価項目・基準の作成
研究所名	教育効果測定研究所(所長 人間社会学科 粟津俊二 教授)
設置開始	2016.4.1
設置終了	2019.3.31

### ■研究の進捗状況（研究員の活動実績含む）

a) 学内外における能動的学習の実施。

- ・ 学内の部署を対象とした PBL を 2 回、および学外の企業を対象とした PBL を 2 回実施した。学外のコンテスト 1 回やコンペティション 5 回に学生が参加した。その他、ゼミや授業内で、小規模の能動的学修を数多く実施した。

b) 実施した能動的学習による学生の変化の質的、量的把握。

- ・ 上記の指導・振り返りを通じて、学生の変化等を検証した。どの活動においても一定の学びに対する動機づけができ、卒業後の社会活動に対する意識向上が見られた。

c) 能動的学習の評価に関する情報収集。

- ・ 海外情報の収集として、OECD が若者のスキル・就業力に関してどのような指標を立て、どのような事例が行われているかを調べ、翻訳出版した。人生 100 時代における学習機会の確保・拡大についての重要性を再確認した。

- ・ 働き方、及び日本の各大学における PBL を軸としたキャリア教育に関して理論・事例を整理し、著作として出版した。

- ・ リーダーシップについての指標や事例の情報収集を進めた。

d) 外部機関（企業など）、卒業生の意見、評価の収集。

- ・ 企業がどのような人材、能力、コンピテンシーを重視しているのか、質的分析およびアンケート調査を行った。日経 225 企業が Web 上に公開している「求める人材像」をリアセック社の PROG のコンピテンシー下位 12 項目にあてはめて分類した。

- ・ 実践女子大学に求人票を出している企業 1000 社を対象に質問紙調査を行い、「採用活動時にどの資質や能力を評価しているか」「どのような方法で、その資質や能力を評価・採点しているのか」をたずねた。

e) a) から d) を踏まえた、評価項目の試作。

及び f) 能動的学習による学生評価及び評価項目の再検討。

- ・ いくつかの授業の指導や振り返りを通じて、学生の変化を 捉えるため、前年度までに開発したものを試用し、修正を行った。

- ・ 授業の感想をテキストデータとしてテキストマイニングを実施し、その傾向を検証した。

g) 能動的学習の改善及びカリキュラム全体の見直し。

- ・ 前年度までの成果と実践を踏まえ、能動的学修を実施した。学生同士の学び合いを企図し、積極的な授業スタッフの受講生への発言・指導、などを従来よりも強調して実施した。

- ・ 他大学研究者の協力をあおぎ、実践女子大学の事例を取り上げて分析してもらった。立教大学から出版されるリーダーシップについての書籍に紹介されている。

- ・これまでに起こった学内外のPBL や学外コンテスト等への参加に一定の効果が見られたことから、授業デザインのモデル化を行った。この内容は、学会発表として報告された。
- ・平成31年度からのカリキュラム改革において、所員が様々な委員としてカリキュラム改革に参加した。能動的学修の導入や位置づけについて、意見を述べた。

### ■現在までの達成度

全体として、順調に進行している。これまでに実施してきた能動的学習活動およびその評価から、能動的学修には学生の意識や能力などに一定の学習効果があり、すくなくとも、実施直後や短時間の遅延後であれば、測定できる可能性があることがわかった。より長期的な効果の測定を目指し、企業による採用活動やスキル・就業力、生涯学習的な評価基準との比較検討も開始できた。また、授業のデザインや運営ノウハウについても経験が蓄積されてきており、見直しやモデル化が進んでいる。専門科目、あるいは共通教育科目カリキュラムへのフィードバックも一定程度はできた。

- ・これまでの能動的学習の導入、学生同士で学び合う学習デザインを継続する。特に、より能動的、主体的に活動を促す Learning Facilitator 制度の拡大を目指す。あわせて、これまで蓄積・開発したルーブリックなども活用しつつ、LF 育成のための研修も、充実させる。
- ・より長期的な教育効果について検討する。学内での学習効果としては、数年単位での教育効果について分析可能なデータが蓄積されたため、検討していく。さらに DP の自己研鑽力も踏まえ、社会人へのトランジション、新たに策定される予定の社会人基礎力の捉え方などとも絡めつつ研究を進めたい。社会人になっても自ら学ぶ機会を創出すること、自己研鑽を促すようなワークスタイルについても調査・研究を進めたい。
- ・定性的なルーブリックだけでなく、教育効果を計量的に測定する指標の構築、またその要因分析を実施したい。とくに、テキスト分析によって自由記述や授業中の発言などを軽量的に捉え、教育効果を測定可能な指標を構築したい。

### ■次年度以降の研究（見込み）

- ・これまでの能動的学習の導入、学生同士で学び合う学習デザインを継続する。特に、より能動的、主体的に活動を促す Learning Facilitator 制度の拡大を目指す。あわせて、これまで蓄積・開発したルーブリックなども活用しつつ、LF 育成のための研修も、充実させる。
- ・より長期的な教育効果について検討する。学内での学習効果としては、数年単位での教育効果について分析可能なデータが蓄積されたため、検討していく。さらに DP の自己研鑽力も踏まえ、社会人へのトランジション、新たに策定される予定の社会人基礎力の捉え方などとも絡めつつ研究を進めたい。社会人になっても自ら学ぶ機会を創出すること、自己研鑽を促すようなワークスタイルについても調査・研究を進めたい。
- ・定性的なルーブリックだけでなく、教育効果を計量的に測定する指標の構築、またその要因分析を実施したい。とくに、テキスト分析によって自由記述や授業中の発言などを軽量的に捉え、教育効果を測定可能な指標を構築したい。

## ■研究活動における成果

### (1) 研究成果（雑誌、学会発表、図書等）

#### 著書

・菅原良・松下慶太・木村拓也・渡部昌平・神崎秀嗣編著（2017）『キャリア形成支援の方法論と実践』東北大学出版会

#### 監訳

・菅原良・福田哲哉・松下慶太（2017）『若者のキャリア形成 スキルの獲得から就業力の向上、アントレプレナーシップの育成へ〈OECD スキル・アウトLOOK 2015 年版〉』明石書店

#### 学術論文

・荒木淳子・正木郁太郎・松下慶太・伊達洋駆（2017）『企業で働く女性のキャリア展望に影響する職場要因の検討』経営行動科学、30(1)、pp. 1-12

・松下慶太・今西正和（2017）「PBL 形式の演習科目におけるルーブリック評価の開発 —学生の「振り返り」に着目した授業評価—」『実践女子大学人間社会学部紀要』第 13 集、pp. 93-109

・粟津俊二・安山秀盛・鈴木明夫.（2017）. 身体的行為の経験に着目した英語語彙修得方法の開発と評価—前置詞の学習. 実践女子大学人間社会学部紀要, 13, 15-27.

・粟津俊二・松下慶太.（2017）. 能動的学修科目を選択する学生の特性—PBL 科目を選ぶ動機とコンピテンシー, 実践女子大学人間社会学部紀要, 13, 29-39.

#### 学会発表

・今西正和・松下慶太（2017）「SBI 法を活用した PBL 科目におけるルーブリックの作成」日本教育工学会第 33 回全国大会（島根大学）

・今西正和・松下慶太（2017）「PBL 科目のグループワークにおける学生の役割意識の変化—振り返りに着目して—」日本キャリアデザイン学会第 14 回研究大会（成城大学）

・KEITA MATSUSHITA（2017）“WORK STYLE AND WELL-BEING IN JAPAN”, ISQOLS 15TH CONFERENCE, INNSBRUCK, AUSTRIA.

・竹内光悦（2017）授業感想の言語データからみる協同学修授業における学生スタッフの影響、日本計算機統計学会第 31 回シンポジウム、179-180。

・竹内光悦（2017）統計グラフポスター作成を用いた統計的問題解決の学修の動機付け、2017 年度統計関連学会連合大会、128。

・竹内光悦（2017）統計グラフポスター作成を踏まえた統計的問題解決力の育成授業、日本行動計量学会第 45 回大会、118。

・竹内光悦・末永勝征・渡辺美智子（2018）統計基礎講座のオンラインテキストの活用、第 14 回統計教育の方法論ワークショップ、7-8（統計数理研究所）

・粟津俊二・鈴木明夫（2017）日本人英語学習者による外国語理解の身体性. 日本認知心理学会第 15 回大会, 07-05.

・粟津俊二（2017）行為の様相が行為文理解時のボタン押し反応に与える影響. 日本認知科学会第 34 回大会. P2-2.

・粟津俊二・松下慶太(2017) 能動的学修科目を選択する学生の特性—PBL 科目を選ぶ動機とコンピテンシー. 日本教育心理学会第 59 回総会, PD31.

#### その他

・松下慶太(2017)「みらいのわたしは「どこ」で働いている?—これからのオフィスのあり方・はたらき方とは—」日本キャリアデザイン学会研究会講演

・松下慶太(2017)「北欧におけるソーシャル・デザイン～メディア・働き方・社会課題～」かわさき市民アカデミー講演

・松下慶太(2017)「ソーシャルメディア時代におけるコミュニケーション」標準化と品質管理全国大会 2017 招待講演

・松下慶太(2017)「仕事にオフィスはもういらない?! リモートワークの光と影」経営学習研究所(MALL) 講演

・松下慶太(2017)「SNS 時代の若者と企業のリスクコミュニケーション」品質と安全文化フォーラム SRM クロスオピニオンセミナー講演

・竹内光悦(2017) 小・中・高・大、そして社会へ続くデータサイエンス教育、大阪数学教育会第 42 回(招待講演)。

・竹内光悦・末永勝征(2018) 次世代型汎用的データサイエンス教育を見据えた授業モデルの構築、H29 年度 共同利用 重点型研究(重点テーマ3)「データサイエンス人材育成メソッドの新展開」研究集会。

・竹内光悦(2018) 統計グラフの指導の視点～目的に応じた見方・使い方～、平成 29 年度統計思考院公募型人材育成事業、初中等から大学等高等教育・EBPK に資する社会人教育を繋ぐデータサイエンス教育の体系化に関する研究ワークショップ。

・渡辺美智子・竹内光悦(2018) Excel 活用: EBPM に資するデータ分析、平成 29 年度統計思考院公募型人材育成事業、初中等から大学等高等教育・EBPK に資する社会人教育を繋ぐデータサイエンス教育の体系化に関する研究ワークショップ。

・竹内光悦(2018) データの活用領域における教材と授業づくり—数学的活動をいかに組織するか—、新しい算数研究、特集: 新領域における教材と授業づくり「データの活用」、8-11(招待寄稿)。

・粟津俊二(2018)「教えて! わかるを生み出す理解のしくみ」. NPO 法人シブヤ大学講演

#### (2) 学生・生徒の教育及び支援に関する還元

・PBL, 能動的学修の機会の提供

・LF の学びに関するワークショップの開発

・学内外 PBL/TBL 活動および学外コンテスト・コンペティションへの参加手順および教員の支援体制の開発・拡充

・カリキュラム改革における能動的学修科目に関する意見